
実は凄い。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実は凄い。

【Nコード】

N5030Z

【作者名】

奥田徹

【あらすじ】

彼は目立たない男だった。しかし、世界一の技術を持っていた。それを彼自身、気づいてなかったのだが…。

彼は常に努力していた。

だが認められてはいなかった。

「君はもっと頑張らなきゃな」

いつもそう言われた。

「はい…」

人柄は良かった。評判も悪くなかった。仕事のミスも無い。ただそれだけだった。

逆に目立つ事も無かった。自己主張が上手い訳でも無く、彼が存在する事を周りは認識していたが、基本的には気にも止めていなかった。

そういった意味で上司も扱いに困った。

良く知らないのだ。なので決まって、

「もっと頑張らなきゃな」

と口にした。

彼は自分が不器用な事を知っていた。他人がやる当たり前の事が、彼にとっては辛く、挑戦すべき事に思え、いつも勇気を振り絞って実行していた。

それは、笑顔で話す事だったり、遅刻しないで出勤する事だったり、電話に出る事だったり、書類を完成させる事だったり…それら一つ一つに緊張し、失敗するかもしれないと怯え、そして何とか乗り越

えてきた。そして誰もいない所で小さく溜息を吐き、「バレていない」と、安堵した。今日もまた平穩に過ごす事が出来た。

彼にとつての努力とは、そう言う事だ。

普通に見られる努力。誰にも迷惑かけない努力。

ある日彼は駅前の占い師に呼び止められ手相を見てもらった。

「なるほど…あんた良かったね」

占い師が手の平を見つめながら低い声で言った。

「え？」

「あんだね、世界一の技術を持つてるよ」

「世界一…ですか？」

「ああ、凄いよ」

「何の世界一なんですか？」

「それは解らないな…だけどね、世界一なんだ。悪い様にはならな
いさ」

そう言つて彼の顔を見つめ、ニコツと笑つた。

無責任で適当に聞こえた占いではあつたが、彼は喜んだ。「世界一の技術」そんなものが僕にある。そう思うと、少しだけ自信が出た。それがなんの技術か解らないと言うのも、時間が経つにつれ、可能性が広がり想像力を刺激した。

実際、彼には世界一の技術が備わっていた。それは神が彼に携えた唯一の優遇。

その技術とは、「犬の腹を気持ち良く摩る技術」。

その事を彼は知らなかった。なぜなら彼は今まで犬を触った事が無かったからだ。人は必ず誰しも「世界一」を携えているという。しかし、それに気づくか気づかないかは運次第だ。例えばレーサーとして世界一の技術を兼ね備えていても、当の本人が車に乗る事が無ければ一生それに気づかなかつたりする。逆にそれに気づいてもどうにもならない事もある。お金が無かつたり、自分が興味が湧かなかつたり。だいたいにおいて、人は自分の能力に気づかず死んでいく。

彼は相変わらず自立たなかった。世間が不況になり、リストラが盛んになって同僚が会社からいなくなっても、彼は会社に残っていた。上司がリストラ社員を決める時、彼が目立たず思い出せなかつたらだ。

「あ…」

「はい」

「君は頑張らなきゃな」

「あ、はい」

上司は彼を見かけ、声をかけ、その時いつも思い出す。そうだこいつがいたよな…。

ある日上司は、忘れる前に言っておこうと、

「君ね、次にミスしたら危ないからね」

彼は唐突に注意され、緊張した。

「え、はい」

実際、上司は彼がミスした所を見た事は無かつた。だが、誰だつて痛い腹はあるはずと、かまをかけた。そして忘れないうちに大きな役割を彼に与えた。

「この書類を先方の専務の家に届けるように」

「はい、解りました。」

「住所は…」

上司は嘘の住所を教えた。その住所を彼が書き記すのを目の前で見ながら、密かにほくそ笑んだ。それは端から彼にミスさせる為に仕組んだ用事だった。書類提出の約束はしていたが、その提出方法は決まっていたはいなかった。彼が時間に間に合わないのを見越し、メールで送信する事も決めていた。

「大事な書類だからね」

「はい！」

彼は緊張していた。緊張し過ぎて無表情になっていた。その為、彼が緊張している事を誰ひとり気付かなかった。

彼は言われた住所にたどり着く。あつたのは小さな動物病院で、勿論専務の家はそこには無かった。

「え…」

彼は住所のメモを確認し、それが間違いで無い事を気付くと、全身から汗がブワツと湧き出た。

「メモを書き間違えたんだ…」

頭が真っ白になり、仕事が無くなる事を想像した。これからの職探し、寒い冬、惨めな人生。約束の時間まで10分を切っていた。

「もうダメだ…」

彼は全身から力が抜け、その場に座り込み、呆然と抜け殻の様になった。

その時、動物病院から大事そうに小型犬を抱えた女性が出てきた。犬は調子が悪く、彼女はその事でショックを受け、頭が真っ白だった。

た。そのせいか、目の前で座り込む彼に気づかず、

「あつ…」

彼にぶつかり、転びそうになり、その弾みで彼女の手から犬が落ちた。

「え、」

彼は反射的に落ちた犬に手を差し延べ、キャッチし抱えた。その手が犬の腹に触り、擦れた感じになると、犬が

「キュワン」と気持ち良さそうな声を出した。

犬は彼の手の中で身体を捻ると、腹ばいになり、

「キュウン、キュウン…」と聞いた事無いような甘えた声を出した。

「へ？」

彼は犬の腹を摩る。犬はとんでもなく気持ち良さそうな表情を浮かべ「キュウン、キュウン」と声を出す。その声に反応したのか、動物病院から一斉に犬が何匹も飛び出してきた、散歩中の犬も走り寄ってきて、遠くにいる犬の遠吠えが町中を一斉に包んだ。犬達は彼の周りを跳ねるように囲むと、腹を向け、「キュウン、キュウン」と甘えた声を出しせがんだ。

「え？な、なんだ…」

その異様な光景は人混みを作り、彼自身は意味が解らずオロオロとした。

「何をしたんだ！」

出てきた動物病院の先生が叫んだ。

彼は犬の腹を摩りながら、

「すみません、大勝建設の芝浦専務のお家を探してまして…」
そう言つと、

人混みがザワザワとして、

「私、知ってますよ。」

と、小型犬の飼い主の彼女が言った。

「え、是非！案内を！」

彼が立ち上がると、犬達も一斉に立ち上がった。

小型犬はまだ彼の手の中で、気持ちよさ気にクネクネしている。封筒を脇に抱え、彼女に小走りで着いていく。

その後ろを犬と、人混みがゾロゾロと着いてきた。

「ここです！」

時間は一分前。

「間に合った！」

彼は小型犬を彼女に返すと、深呼吸してチャイムを鳴らした。

出て来た専務は犬と人だかりに度肝をぬかしたが、

「お待たせしました。こちら、約束の書類です！」

「あ、ああ…はい。ご苦労様。」

彼は何とか書類を渡す事が出来た。

彼は集まってきた犬と人々に丁寧に辞儀をした。

何故か拍手が起きた。が、拍手により人々は納得した気分になり、それぞれに分かれて行った。

「ありがとうございます！」

ちよつとしてから携帯がなった。上司からだ。

「書類はどうした？」

「はい、今、無事に…」

「へ？」

「間に合いました。」

実際何が起きたのか理解出来なかったが、ホッと一息吐いた。

何とか今日も無事に過ごせた。

その後、彼は緊張しながらも、地道に毎日を積み重ねた。あの一件後、上司はリストラされた。送ったメールが謝罪から始まっていたので、不審な行動がバレたのだ。彼は相変わらず馴染む事も無く、ただただ努力を重ねた。そして、自分の持つ世界一の技術には気付かないままだった。それで良かった。彼は幸せだったのだから。

結婚して、一匹の犬を飼った。

犬はいつも腹を見せ、彼に擦り寄るといふ。とても彼になついているらしい…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5030z/>

実は凄い。

2011年12月17日00時56分発行